

正気を保つために

人物

田七（キミオ）

未知（浮浪者）（女性1）

小林弐千年（女性2）

本文

開演のベルが鳴る。

田七 やれやれ。やっとこ警察を辞めて、探偵事務所を構えて早々、やっかいな事件にまきこまれちゃった。殺人をしたのが、かつての同級生だなんて！

何も起こらない。

未知 私は朝起きる、いつもの晩に、繰り返しくりかえし、たくさんの、子供たちが遊んでいた、あの団地の公園に立っていたとき、遠くに見たさなぎについて、聞いた。それはたくさんの問題があった……。悪い人だったわけです、昔、地球をゆっくり眺めて、こう考えた、自分のものにしたい、私は、なるべく大きな質量を、そうだったでしょ？

小林弐千年 体操ですよ、大事なのは、体操、やりますよ、体操

ダンス。

小林弐千年 探偵さん

田七 ハイ

小林弐千年 色々考えましたけれども、旅をして、どこも同じ風景が続いているので、私も勇気を出さないと、行動をしないといけないと思い、探偵さんを探しました

田七 こみいった事件なわけです

小林弐千年 私の兄です

田七 続けて

小林弐千年 幽霊に出会ったと言ってしばらく姿を消しました。じきに帰ってきたんですけど、いつもどおりご飯も食べて、何も変なことはないんですけど、でもなんだか気味が悪いんです

田七 ご飯を食べるほかには？

小林弐千年 わからないです、気味が悪いんです

田七 そういうこともあるよ。帰りなさい、みんな心配している

小林弐千年 私はこの、裏で、裏側というのをいつも感じている。物事には全部、裏があって、太陽の光にも裏はあるし、重力にも裏はあるし、夢にも裏はある。ここが裏でない、とは誰も言えない。好奇心が私はいつも動いている。ここは病院だったっけ。

田七 病院じゃないですよ。お名前とご家族は

小林弐千年 小林弐千年（こばやし・にせんねん）です。父はいないです、死にました。母は死んでないです。それと、あと、何かいます

田七 何かとは

小林弐千年 リビングに何かいるんですけど、私にはよくわからないんですけど、でも何かいるんです

田七 生き物ですか

小林弐千年 はい

田七 人間ですか

小林弐千年 何かです

田七 やわらかいですか

小林弐千年 はい。でかいです

田七 ウン

小林弐千年 お願いしますね

田七 大した違いはない。色んな選択があったわけです。雨が降っていて、そのとき私は、鳥が街を見下ろすような、そんな気分がしていた。慣れない電車に乗って、しかしそれは誰かにとっては慣れた電車であるという感じが、私は気持ち悪い。電車に乗って.....毎日電車に乗って.....それは何かの、抵抗の身振りには、なるだろうか。

電車が走る。街が形を変えてゆく。明るい光が差し、明るい音楽が流れる。

未知 気持ちのいい午後に南瓜が並ぶのを見ていた、そのとき私はパーマをあてたばかりだった。呼吸の深い夏で、まだ生きていたトラ猫は、チブルという名前。私はまだこの街に慣れていなくて.....。もし兄弟がいたとしたら、何の意味もなく、連絡をとってみたいと思った。

未知 はじめたばかりのソーシャル・ネットワーク・サービスをただ、意味もなくめくっていて、キミオ君という文字列を久しぶりに見た。どんな会話をしたんだっただけか、まったく覚えていないけれども、キミオ君、どこかのお店でビールを飲んでいる写真だった。背後に、「へぎそば」の文字。それは思い出の質感があった。あのお店は、無理やり手伝わされた軽音楽部の、一度だけ関わったバンドのひとたちと、なぜか行った中古レコード屋さんで、私はただ壁をぼうっと見ていたのだけど、そのレコードの絵にはひらがなで4文字、「ゆでめん」とあって、変な名前のバンドもあるなと思った、そういう質感で、「へぎそば」は私には体感されたのだった。「へぎそば」、その響きについて思いをめぐらせつつ、私はいちにち図書館とベローチェで時間をつぶして、夜に会った友達は学生のときにアルバイトしていた江戸東京博物館で一緒だった、今は保険の営業としてこの街に住んでいて、彼女はいつもどおりお茶で割ったお酒を飲んでいて私は、話に飽きたわけではなく、なぜか振り返ったのだった、それはただ予感だった。そしてその瞬間、あっ、私は、「へぎそば」の文字列をみつけた。キミオくん、この街にいるらしい。そうして私は、あの「ゆでめん」というバンドのことを思い出し、帰り際、まだ開いていた **TSUTAYA** の検索機で、「ゆでめん」を調べてみた。でも見つからなかった。高いレコードだったもんな。

人々の声が静かに耳につく。ここは都会である。

小林弐千年 都庁の背中が夕日を浴びていて、帰ったら初めて何かがいた。私はこれは何かだと思った。翌日、私の家の前に黒い車が止まり、男が現れて、私の家を見つめ、そして走り去った。そのとき兄はまだ正常だったけれども、私たちの一家は、ちょうど去年の今頃、東京に引っ越してきたのだった。何かはきっと私たちを見ている。見ているという存在が家

の中にあると、私たち家族は、でも元気にはなったかもしれない。少なくとも兄は、よく歌うようになった。たとえばこんな歌。

小林弐千年 めくるめくミラーボール乗って水星にでも旅に出ようか／いつか見たその先に何があるというの／きらきら光る星のはざままでふたりおどりあかしたら／もっと輝くところに君を連れて行くよ

小林弐千年 そうして兄は幽霊を見ることになる

幽霊の存在が感じられる。

田七 帰り道、私は誰かに復讐されているような気分がしていた。これは言葉の問題だ。何か悪い言葉が、私に関する悪い言葉が世の中にあるように思えて、私は、ドブ川の脇にある成城石井に入って、それらしいワインを**2**本と、クセの強そうなチーズと、ステーキ肉を**900**グラム買った。インターネットのビデオで、ポランスキーのチャイナタウンって映画をレンタルした、私は事件が入り組んできたところで眠ってしまい、起きたら最後のシーンだった。衝撃の結末。何が衝撃なのか、さっぱりわからない……。野良猫が交尾をしていた、私は神田川が近かった……。カーテンを開けると浮浪者と目が合った。どこか懐かしい目だった。

未知 お前は自分がばったり殺され屋さんだって気づいて生きたことがあるか？ おれはあるんだけど、でもなんとか秋までは生き延びてみせるな。それから夜が長くて夢とまじるんだ、こんなきたない街であっても……。

田七 ばったり殺され屋さんっていうのは言い得て妙だ。その夜の気分ちょうどいい頃合いの感触だったよ。あいつの言葉を翻訳するとういうことだ。つまり想像力がないと、生きていくことができない。これはブッダだってジョン&ヨーコだって言ってることだ。ちなみにブッダは**80**歳で死んだ。ジョンは**40**歳で殺された。美しい関係性だと思うね。

夜が明ける。

未知 車が去っていくようです、すでにたくさんの荷物が積まれた。街が妊娠しているように、私たちには、感じられた。足音を消すように歩いて、教会の前を通り過ぎ、言葉をいくつか、なくしたようだった。午前五時半、私はしばらくデニーズで休もう。

変わらずに日々は送られる。
こうした時間は記録がされない。

小林弐千年 兄貴。兄貴がチーズを食べられないということを忘れてちょっといいチーズを買ってしまったことを許して。私は今日学校で、演劇をやっている友達から役者をやらないかって誘われたんだけど、返事は来週にしておいたよ。私は今まで自分の体がどうかなんて考えたことなかったの。でも興味そのものは、いいことだと思うな。

田七 いいね！

小林弐千年 私の体はある程度コマーシャルなんだろうか

田七 バスケットやってたでしょ！

小林弐千年 うん。やってた。重たかった。ボール

田七 大丈夫だよ！ 鍛えてるし！

小林弐千年 うん
田七 うん！
小林弐千年 ごめんねチーズ
田七 いいんだよ！
小林弐千年 ほんとうにごめん
田七 いいんだって！
小林弐千年 私出ることにしようかな、演劇
田七 いいね！ 観に行くよ！
小林弐千年 来なくていいよ
田七 観たいなァ！ 演劇！
小林弐千年 いいよ
田七 観たいなァ！
小林弐千年 来ないでいいよ

田七 そういえばスゴク久しぶりに田七（タシチ）くんから連絡があつてさ、今度会うことになったんだよ！ 探偵なんだってさ今。カッコいいよなァ！ 僕昔さ、田七くんも演劇やっててさ、それで観に行ったことがあったよ。でもやっぱりなんとなく連絡とらなくなつてさ、それから会ってなかったんだけど。なんだか急に連絡くれたんだよ！ 懐かしいなァ！ ツカコーヘーをやってたんだよ。知ってるかいツカコーヘーって。面白いんだよなァ！ なんか殴ったりするんだよ。面白いんだよなァ！

小林弐千年 私は晴れた午後にベランダに出て、プレミアム・アイス・ティーを飲みながら日経サイエンスを読むのが日課なのですが、暗黒物質には様々な説がある。曰く、アクシオンという理論上の粒子は、まさにこの空間に、**1**立方センチあたり**10**兆個くらい存在しているらしい。もちろん目には見えなくて、重力を通じてのみこの宇宙に影響を与えていて、銀河団とかそういうやつはそれによって形を保っている。アクシオンという名前は洗濯用の洗剤から採られたらしい。我が家ではアリエールを使っていますよ。相変わらず何かは存在している。我が家のリビングにいる何か。私は夜寝ていてたまたま目を覚ますと、窓の外に赤い大きな目玉が見えるようになった。本来だったらどこかに電話しなくちゃいけない、でもタウンページを開いたってそれらしい番号は載っていないし。朝は温かいほうじ茶を飲みますよ。私が朝ごはんを食べる、その時間に、だいたいみんなはいない。こういうとき私も音楽をかける。家族の誰かがかけた**CD**がプレーヤーに残っている。私はふだんラジオ・ヘッドとか、ワン・オートリックス・ポイント・ネヴァーとかを聴く人なんですけど

大和屋笹「殺しのブルース」

男前の殺し屋は香水の匂いがした
「でっかい指輪をはめているな！？」
「安かねえんだ！」
「安心しろ そいつには当てねえよ...」
まがったネクタイを気にして死んだ

寝ぼけ顔の殺し屋は寒そうに震えてた
「女を抱いてきたのか？」
「あたりきよっ」
「湯たんぽを抱きな...」
熱い鉛を抱いて死んだ

未知は川沿いに立つ。

未知　今度から勤める会社は何でもない、インターネットで健康食品を売っている会社なんですけど、ロゴのキャラクターがそんなに可愛くないワニで、私はそれが気になったのも実は応募した理由でもあったのだった。ワニの誕生は実はジュラ紀よりも古いのですが、だいたい2億年前、三畳紀末の大量絶滅をワニは生き延び、それから訪れた恐竜の時代を、某ティラノであるとか、某トリケラであるとかと一緒に過ごした後、あの白亜紀の巨大隕石の落下ですら、ワニは滅びることはなく、氷河期を超え、人類と出会い、今ではナイル川流域から熱川温泉に至るまで、地球のあらゆるところに分布し、しかもその間形態はほとんど変わっていないという……。日本生まれのワニはいないと長らく思われていましたが、**1964**年に大阪府豊中市の、およそ**40**万年から**50**万年前の地層からワニの化石が発見され、マチカネワニと名付けられました。マチカネワニの学名はトヨタマヒメイア・マチカネンシスといって、もちろん由来は古事記に出てくるワニの化身の女神のトヨタマヒメなわけですが、日本におけるワニの化石はその後岸和田市のキシワダワニ、静岡県浜松市のヤゲワニなどが発見され、島根県の隠岐では東アジア最古となる約**2000**万年前のワニが

未知　まあべつにそれはどうでもよくて、つまり地球はそもそもが人類のものではないということです。

田七　私が昔演劇の真似事をしていたとき、演出のダダダダ獄門島くんがこう言った。舞台の上と、舞台の下には、本質的な違いというのはなくて、ほんの少し、しつらえがあるか、ないかの差でしかない。俺の仕事はほんの少しのしつらえでしかない。つまり、見えない観客というのはどこにも存在している。これは科学が発達すればわかることだ。すでに予言はされている。そうでないと、そもそも俺たちの存在じたいが、よくわからないことになってしまう……。ばらばらになってしまう。俺たちにできることは少ない。めそめそするか、踊るか、せいぜいそれくらいだ。これは本当はみんなもうわかっている。認めたくないだけだ。これに自覚的だった人間は少ない。ウィリアム・シェイクスピア。つかこうへい。それからこの俺。それだけだ。私はダダダダくんはあまり得意ではなかった。しかし彼はなかなかちゃんと演劇をやっていて今度なんか芸能人が出るらしい。エライもんだと思う。

小林式千年　兄貴。日曜の朝**8**時だよ。こんな時間に出かけるなんて、珍しいね

田七　妙なんだよ。**3**時くらいからもう明るくてさ。コーヒー飲んだみたい眠くないんだ。ひとりでツインピークス観てただけど、ひとりだったはずなんだけどさ。でもなんだか、友達がいるみたいに、天気がいいんだよ。おかしいなって思って。パソコン消してさ、窓を開けたんだけど、まるで街には誰もいないみたいで、こんな街が無限に続いているなって思った。久しぶりじゃん

未知　お父さん元気

田七　死んだよ

未知　ごめんね

田七　だいぶ前だけど

未知　うん

田七　熱川だったよ

未知　え？

田七　伊豆の

未知　うん

田七　知らない？

未知 うん
田七 そうか

未知 私キミオくんのお父さんってお世話になったことがあったって、最近思い出して
田七 そうなんだ
未知 私ワニの化石掘ってて、部活で
田七 そうなんだ
未知 急に思い出して
田七 うん
未知 受験が終わった頃だったでしょ
田七 何が
未知 お父さんが化石みつけて
田七 うん
未知 ニュースになってて
田七 受験？
未知 高校の
田七 うん
未知 うん、だからなんか気になってて、私ワニが
田七 うん
未知 だから（部活に）入ったんだけど
田七 そうなんだ
未知 うん

田七 食われたんだってさ
未知 え？
田七 食われたんだよ
未知 ああ
田七 ワニに
未知 うん
田七 食われたんだって、ワニに、いきなり
未知 そうなんだ
田七 熱川で、伊豆の
未知 そうなんだ
田七 聞いた話だけど
未知 うん

田七 まるでバナナみたいに
未知 まるでバナナ？

田七 君はあれか、幽霊か。そうしてこの僕になにかをさせようっていうわけか。どうして思い出させるんだ。僕はそんなに、積極的にになにかをしたいわけじゃない。僕はちゃんと働いていさえすればいいんだ。ワニがどうしたっていうんだ。呪いだとでも言うのか。ワニが呪うなんて聞いたことがないよ。もうどっかにいけよ。僕なら街のどこかにはいるよ。僕はこのままの名前でいるよ。もうあんまり喋りたくもないんだ。一人にさせてくれよ。

小林武千年 いってらっしゃい
田七 いってくるよ

未知 起きたらすごく疲れていた。確かに昨日はお風呂に入らずにシャワーで済ませたけど。悪夢だったかもしれない。ワニの夢だった。別に怖いことではなかった。でも悪夢の感覚が、ずっとしていた。変な空と泥があった。変な人、それは怖さだった。

田七、走っている。

田七 私は最近ジョギングを日課にすることにしたのだ。朝、ほんのり白んできた時間に家を出る。昨日の肉とワインがまだ体に残っている。川を渡り、坂を上り、しだいに繁華街に出る。まだ人のいない、かすかに吐瀉物の香る、風のない街だ。道路が二又に分かれるところ、ダサイ標語が立っている塔があり、その根本は腰かけることができる。私はそこに座って、交通のない道路をしばらく眺める。自販機で買ったウーロン茶が右手にある。そのとき、私は真ん中にいるような気がする。ここが世界で一番見通しのいい場所だ。掃除したての部屋のような脳みそで、世界を見ている。まったく美しくないことで、私は安心できる……。私はそこで眠り込んでしまったようだった。気がつくとなんか街が、私を取り囲んでいて、一瞬自分が子供にでもなったような気がする。

未知 すみませんアンケートなんですけど

田七 はい

未知 健康食品なんですけど、よく眠れるビタミンと、あとストレスがなくなるやつ、ギャバとかそういうやつなんですけど

田七 そうですか

未知 特徴としては、おいしいというもので

田七 はい

未知 すごい京都の有名な、世界的に賞とかとってるショコラティエと共同開発したのです

田七 私は、あっ、この女性は学校のパソコン室でよく大量に印刷をしていた人だと思った

未知 感想を聞かせていただけると抽選でプレゼントがあります

田七 そうですか

未知 どうですかひとつ

田七 いただきます（食べる）

未知 いかがですか

田七 おいしいです

未知 どのように

田七 こう、いい具合に、苦くて

未知 はい

田七 あと、甘みが、なんか

未知 ありがとうございます。ではこのくじをひいてください。……あ、一等ですね。一等です！ おめでとうございます！

未知、ジャンパーをもってきて田七に着せる。ジャンパーにはワニのロゴが入っている。

未知 （歌う）かっこいいままでないよなジャンパ〜

田七 これは

未知 弊社のオリジナルジャンパーです

田七 ありがとう（走り去る）

未知 私はその人がどこかで見たことがあるなと思ったけれど最後まで思い出せなかった

小林式千年、近づいてくる

小林弐千年 あなた、兄が見たという幽霊に似ていますね

未知 アンケートやりますか

小林弐千年 いいです。兄はあの日から、どこかおかしいんです。例えるなら、すごく何かのふりをしている

未知 ジャンパーほしくないですか

小林弐千年 物語ではよく人は狂ってしまうけれど、実は私たちはカジュアルに正気を失ってしまう。それはプリングルスを一本食べてしまうくらいのカジュアルなものなのです

未知 はい

小林弐千年 どうしてここにいるんですか

未知 研修で

小林弐千年 何の研修ですか

未知 人間の

小林弐千年 人間

未知 人間ですよ

小林弐千年 私も受けなきゃ、人間の研修

未知 キミオくんのことですか

小林弐千年 そうです

未知 キミオくんの夢はずいぶん前に見ました。夜に急に気温が下がった日。あれは悪夢でしたよ。確かに寝るまで日本住血吸虫の **wiki** を読んではいました。でもそういうときだってあるじゃないですか

小林弐千年 兄はそのあとどこかに出かけていきました

未知 何も知らないです

小林弐千年 私は実はあのあと兄の交通系 **IC** カードの履歴を調べたのです。しかしその日兄は何にも乗っていませんでした

未知 車を運転していったのかもしれない

小林弐千年 そうかもしれませんが、でもそうではないと思います

未知 どうして？

小林弐千年 私だったらそうしないから

未知 歩いてどこかに行ったと

小林弐千年 兄の靴には泥がついていました。兄はあまり歩かない人です。これはきっと特別なことです

未知 はい

小林弐千年 あなたにできることはない。私にも

未知 生きていましょうね

小林弐千年 生きていましょう。会えてよかった

田七 ばったり殺され屋さん、それは私のことだ

田七 先日、キミオくんと会った。私とキミオくんは握手を交わし、一緒に青いジンを飲んだ。新宿の裏路地で、外ではスケーターボーイたちがサイファーを始めた。適度に演技された喧嘩だ。私は念のためにコルトを持参していた。暑い日だった……。キミオくんは言った。僕は正義も真実もわからなくなってしまった。僕は僕がリアルだと思うことだけを本当は生きていたい。この間、誰にも言わずに遠くまで歩いたんだ。長らく使われていない運動場があって、それは川の近くで、二日前に降った雨はまだ乾いていなかった。僕は個別に見えるものにそれぞれ、苛立ちのようなものを感じた。それは僕という個人の、細胞がべつべつに抱えている苛立ちのようだった。ヘリコプターが通り過ぎた以外は僕は一人だった。ずっとうろうろと運動場を回りながら、その円運動のさなか、きっと僕は何かを捨てる決心をしたんだと思った。僕は僕が死ぬことを考えた。つまり、先の話だ。でもすごく遠くでも

ない、いつかの話だ。そのときにはきっと僕は本心からの言葉を言うだろう。その言葉のために生きる生でしかないというようなことを思ったんだ。その一言を言うことだけがこれからの僕の生きる意味でしかないんだ。それ以外のことは何なんだろう。きつとなにかのふりでしかない。見るふりをしながら君の目を覗き込むようなことさ。これには果てがない。でも仕方ないんだ。僕のとなりにはいつもワニがいて、いつそいつが気まぐれを起こして咬みついてくるか、わかったもんじゃない。君も気をつけたほうがいい。あまり何かに入り込むといけない。本当はこんなとこに来てはいけない……。そのとき、どこかそう遠くないところで、コルトの音が聞こえたのだった。私たちは会計を済ませて外へ出た。キミオくんにもう一軒誘われたが私は断って店の前で別れた。私は音の聞こえた気がする方角へ向かい、雑居ビルの階段を上った。屋上に出る手前の踊り場で、死んでいたその男は、私にあまりにもよく似ていた。ワニのロゴがはいったジャンパー。窓から外を見る。キミオくんが走って逃げていく後ろ姿が見えた……。

田七　私が語るのはここまで

小林弑千年　兄貴

田七　おかえり

小林弑千年　何聴いてるの

田七　これは過去からのラジオ

ラジオからはっぴいえんど「さよならアメリカ　さよならニッポン」が聞こえている

小林弑千年　過去からのラジオか

田七　旅行に行こうよ、車に乗って、東北にでも

小林弑千年　東北は寒いよ

田七　東北は寒いね

田七は頭蓋骨を取り出す

田七　僕の生まれてすぐに手塚治虫が死んだんだ、僕は長いことこれは手塚治虫だと思ってた。でも違うんだという。一体誰なんだろうね、これ……

小林弑千年　どうしたのそれ

田七　友達からもらったんだ、ずっと誰にも言わなかった。その友達はじきに転校してしてしまった、**1999**年の**7**の月にね

小林弑千年　うん

田七　二十歳を迎える少し前、半年だけ煙草を吸っていた時期があった。キャメルの緑色のやつ。僕はこれをベランダの手すりに置いて、新しい箱のフィルムを破った。そのとき、僕はこいつを死ぬまで手放さないだろうと思った。僕は昔作った**MD**を聴きたかった、でもそれは誰かに貸したままになっていた……。本は読み終わるし、映画は終わるんだよ。これはただのエンドマークだってことさ

小林弑千年　貸して

小林弑千年は頭蓋骨を手を持つ

小林弑千年　このままどこかへ行ってしまうと、もう兄の言葉は聞かなくて済む。一生兄の言葉を聞かなければ、私の人生のなかの兄を沈黙させてしまえば、そこで兄の物語は終わる。私の生きてきたなかですでにたくさんの物語が終わった。もちろんまた始まることもあるだろう、全く違ふかたちで。でも本当は、私は終わりにはもう慣れている。

小林武千年 （歌う）めくるめくミラーボール乗って水星にでも旅に出ようか

頭蓋骨を捨てる

ON

田七：アルファー

未知：オメガー

小林武千年：ガムマー

アルファー ゲエ

オメガー ゲエ？

ガムマー ミルボン

アルファー ナム、ナム

ガムマー バア

アルファー タガッタガッ

オメガー ベロ

アルファー ガガガ、ダ、ボ ヌゲツヌゲエ

ガムマー レレレ

アルファー フ

オメガー オゴ

アルファー ララ、メッ

ガムマー ホ

オメガー アッアッ

アルファー アゲヌ

ガムマー ヒョー

アルファー カカ、うわあ

オメガー オモゲ

ガムマー メル

アルファー ピ、ピ

ガムマー フギ

アルファー メ、メ、メ、メ、メ、メ、メ、メゴ

オメガー ウオオウオ、メ、ヒッヒ、ヒィ、ミィ、ヒィ、ケ。

アルファー サ、サ

ガムマー ウケ、ケッコ

オメガー ザマ

アルファー ズッ、ズッ、ズッ

ガムマー ゼ

アルファー ハ、ハゴ、オアッアアア

ガムマー ゼ

アルファー レ、レブ、ミミツミイイ

ガムマー ゼ

アルファー サボ

ガムマー ゼ

アルファー ゲツゲ

ガムマー ゼ

[illegible]

オメガー ザム
アルファー ザム
ガムマー ザム
オメガー ザム
アルファー ザム
ガムマー ザム
オメガー ザム
アルファー ザム
ガムマー ザム
オメガー ザム
アルファー ザム
ガムマー ザム
オメガー ザム
アルファー ザム
ガムマー ザム
オメガー ザム
アルファー ウウウ、ウウウウウウ、ウウウ、ウウウ、ノ、ウ、ノ、ノ、ノウ、ノノ、
ノノ、ノウウウ、ウウ、ウ。ウーワッ、ウワッ、ウーワッ、ウワッ、ノ。ノメーッ、ノ
メーッ、ノーノーノーノメッ、ノメウ、ノメウ、ノノノ、ノノノノナッノノノ、ノヒーッ、
ノヒーッ、ノヒーヤッ、ヤッ、ヤッ、ヤッガッ、ヤ、ヤッガッ、ガ、ガ、ガ、ガゴ、ゲゲゲ、
ゲエ、ゲゲゲ、ゲエ、ゲエ.....ゲエ.....ゲエ.....ゲエエ.....ゲエエ.....俺は.....俺は.....俺
は.....俺は.....俺は今日.....今日という日.....オッ俺は.....俺の.....朝.....俺の.....朝.....
コーヒーと卵にすべてを期待した、天気予報は、信じる.....今日は暑くなる.....。あの日と
同じ、逃げ水の、中から.....くたびれた、妄想、頼りない、俺の、思い描いた、あの、あの、
あの、あの、街の中を、捨てられた、錆びたお茶の、空き缶のことを.....



Bob Marley, *Get Up, Stand Up* (Live)

田七 キミオくんと会う2日前のことだ。私はレガエの流れるミスタードーナッツで、2人の女性が会話をしているのを、聞いていた。

小林式千年 私たちの人生は変だ
未知 はい
小林式千年 そうでないですか
未知 でも、他の形が、あり得たとしても
小林式千年 はい
未知 それは私たちの、あくまで願望です
小林式千年 はい
未知 願望は
小林式千年 はい
未知 願望なんです
小林式千年 願望です！
未知 私たちの生きる、この、このことが
小林式千年 はい
未知 あくまで可能性であってほしいという、願望なんです

小林弉千年 何が悪いですか
未知 悪いことは何もないのです
小林弉千年 はい
未知 何も悪いことはないのです
小林弉千年 はい！
未知 はい！
小林弉千年 はい！
未知 そうです！
小林弉千年 そうです！
未知 そう！
小林弉千年 そう！
未知 そうだった！
小林弉千年 そうだった！
未知 すべてそうだった！
小林弉千年 そうだった！
未知 すべてそうだった！
小林弉千年 そうだった！
未知 すべてそうだった！

Bob Marley、大きくなり、幕